The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	仙台方言話者のスタイル切換え
Author(s)	阿部, 貴人
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2004, 6, p. 2-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第6号（2004年3月）2-22

仙台方言話者のスタイル切換え

阿部　貴人

1.　調査の概要

1.1.　インフォーマント情報

〔表1〕

	年齢	職業	居住歴
SA	72	元教師	0-：宮城県仙台市
SC	71	元教師	0-：宮城県仙台市
YA	21	学生	0-：宮城県仙台市
YC	21	学生	0-：宮城県仙台市
YF	28	学生	0-18：青森県弘前市　18-東京都　22-大阪府

1.2.　談話情報

〔表2〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老－老	SA－SC	友人	45分	SA主導
老－若	SA－YA	祖父と孫	31分	同程度の発話量
老－調	SA－YF	初対面	38分	YFが質問、SAが答える
若－若	YA－YC	友人	34分	同程度の発話量
若－調	YA－YF	初対面	32分	YFが質問、YAが答える

2.　結果および考察

2.1.　自称詞

2.1.1.　結果

〔表3〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ワタシ系*1	-	-	19	-	-	-
ボク	-	-	-	-	-	21
親族名称*2	-	2	-	-	-	-
オレ	3	4	7	10	6	-
オラ(ー)*3	20	16	-	-	-	-

*1 いわゆる有声化現象によるワダシやアダシ、複数を表すワタシラ（1例）を含む
*2 親族名称はオジーチャン
*3 複数を表すオラダヂ(1例)を含む

(1) SAのオラは《対老》《対若》で使用され、ワタシ系は《対調》のみで使用されている。

(2) SA のオレはすべての場面で使用されており、自称詞全体の切換えのあり方は連続的な切換えとなっている。

(3) SA の《対老》において、表に含めていない直接引用発話でワタシ系が 2 例使用されている。これらの直接引用発話は、女性が SA に向けて行なった発話を直接引用したものである。男性の発話を引用した場合や SA 自身の過去の発話を引用した場合にはオラ（2 例）、オレ（1 例）となっている。

(4) YA は《対老》《対若》でオレ、《対調》でボクを使用しており、カテゴリカルな切換えとなっている。

2.1.2.　解釈

(a) (2) のように、SA のオレはすべての場面で使用されていることから、スタイルと連動しないニュートラルな形式であると考えられる。

(b) (1) (2) から、ワタシ系＞オレ＞オラといったスタイルによる位置づけがあると予想される。

(c) 切換えの対象について

(c-1) (3) のワタシ系は自分以外の話者の発話であることを示す役割語としての性格が強いと考えられる（SA は女性の発話を演じ、女性らしさを出していると思われる）。引用以外の発話の切換えと同列に扱ってよいものか、またスタイル切換えと捉えてよいものか、検討が必要である。なお、SA の《対調》では直接引用発話が見られないため、《対調》のワタシ系が女性らしさを示すことと関わっているか否かは不明であるが、「共通語的＝女性的」といった意識がある可能性もある。

(c-2) この切換えもスタイル切換えのひとつ（ドメイン内切換え）と捉えると、直接引用発話において他の要素も切換えるのかを分析する必要がある。つまり、引用を演じる場合にはすべての要素が切換えられるのかといった research topic が考えられる（代名詞という語彙レベルの切換えは文法形態素の切換えに比べ操作しやすいと考えられるため、言語項目によって切換えが異なる可能性もある）。

2.2. 対称詞

2.2.1. 結果

〔表 4[*1]〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
アンダ	-	-	7	-	-	-
名前[*2]	-	12	-	2	-	-
親族名称[*3]	-	-	-	-	3	-
オメ(ー)[*4]	9	-	-	-	-	-

*1 SA は、談話収録の前後で、YF を「先生」と呼んでいる。
*2 SA の場合は first name 、YA の場合は family name である
*3 親族名称はオジーチャン
*4 複数を表わすオメーラ(3 例)を含む

(1) SA は、《対老》でオメ(ー)、《対若》で YA の名前、《対調》でアンダといったカテゴリカルな切換えを行なっている。

(2) YA は《対老》で親族名称（オジーチャン)、《対若》で YC の名前を用い、《対調》で対称詞を用いないといったカテゴリカルな切換えを行なっている。

2.2.2. 解釈

(a) SA は、アンダを初対面である調査者に対してのみ使用することから、SA にとって待遇価は低くない形式であると思われる。つまり、オメーとアンダといった 2 つの方言コードで切換えているものの、方言形式＝オメー、共通語形式（あるいは非方言形式）＝アンダ、といった位置づけを行なっている可能性がある。

(b) §2.1.1.(3) と同様に、女性の発話を引用する発話ではアンダが 3 発話みられる。男性の発話の引用・SA 自身の過去の発話の引用において対称詞を使用していないため、§2.1.の自称詞との比較はできないが、対称詞においても性別を軸として（あるいは役割を意識して）切換える可能性がある。

(c) YA の《対調》で対称詞を用いないことについては、(c-1)（c-2）の回避と（c-3）のデータの性質といった可能性が考えられる。

(c-1) 相手に言及しない（回避する）ことによって改まりを示すストラテジーである。同様の考察は、松丸・辻（2002）における東京下町方言話者 SA・YA、舩木（2003）における鹿児島方言話者 SA・YA、細谷（本号）における大阪方言話者 YA、篠原（本号）における広島方言話者 SA・YA でみられる。

(c-2)「アナタ」「キミ」「オマエ」などの形式の選択ルールの違反を避けるストラテジー（李 2002 の韓国語母語話者）である。

(c-3) 2 人 1 組の談話場面であるため、特に話し相手に言及しなくとも会話に差し障りがない（李 2002 の韓国語母語話者)、あるいは調査者が質問し、それに回答

するといったインタビュー形式であるため、相手を言及することがない（橋本2002）といったデータの性質が影響している。

(d) なお、SA の《対調》で使用されるアンダは、7 発話すべてが YF に対する質問で使用されている。

〔1〕

→278SA:教師って　言うのは　やっぱり　あ、あの　ね↑(YF:はい)なかなか、(YF:んーー)試行錯誤ですから。(YF:あーー)あんだも　{笑いながら}そーじゃないですか↑

279YF:{笑い}　〔老－調〕

YF に対する質問はこの 7 発話のみである。したがって、SA は対称詞が使用できる文脈においては相手に言及しており、ストラテジックな不使用や回避を行なっていない。

(e) YA は YF に対して質問をしていないため、(c-1) ～ (c-3) の可能性を示すに留める。YF に対して質問をする場面のデータ収集・分析が必要である。

2.3.　ガ格

2.3.1.　結果

〔表 5*1*2〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ガ	-	-	31(48.4)	13(31)	12(27.3)	37(90.2)
φ	72	48	33(51.6)	29(69)	32(72.7)	4(9.8)

*1　(　) 内は%　縦の合計が 100%

*2 「水φ　飲みたい」のようにガ格／ヲ格両方に解釈できるものは除外した。また、ガ／ハのどちらであるかが判断できないφも除外した。

(1) SA は《対老》《対若》ではガを明示せず、《対調》では約半数の使用となっており、連続的な切換えを行なっている。

(2) YA は《対老》《対若》でガを 30%程度使用し、《対調》では約 90%使用するといった連続的な切換えを行なっている。

2.3.2.　解釈

(a) (1) (2) のように、φがドメイン間での切換えにあずかっている。この点は松丸・辻（2002）の東京下町方言話者、阿部・坂口（2002）の津軽方言話者とも共通する。以下に、東京下町方言話者と津軽方言話者のガ格の表を挙げる。

〔表 6*1 東京下町〕

	老（SA）						若（YA）					
	対老		対若		対調		対若		対老		対調	
ガ	31	(83.8)	58	(96.7)	90	(96.8)	52	(72.2)	14	(63.6)	46	(79.3)
φ	6	(16.2)	2	(3.3)	3	(3.2)	20	(27.8)	8	(36.4)	12	(20.7)

*1 「水φ 飲みたい」のようにガ格／ヲ格両方に解釈できるものは除外した。

〔表 7 津軽〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ガ	-	-	8(40)	12(12.5)	10(16.4)	46(93.9)
φ	8	16	12(60)	84(87.5)	51(83.6)	3(6.1)

表から、

（・）東京下町方言話者 SA・YA はどのドメインでもガを明示させる割合が高く、《対調》で最もガを明示するといった連続的な切換えを行なう。

（・）津軽方言話者 YA は、同一の方言話者との会話である《対老》《対若》ではガの明示率が低いが、《対調》では圧倒的にガを明示させるといったほぼカテゴリカルな切換えを行なう。

（・）津軽方言話者 SA は、《対老》《対若》ではガを明示せず、《対調》でガを明示する（40％台）といった連続的な切換えを行なう。

の 3 つが言える。仙台の SA・YA の切換えは、（・）（・）の津軽方言話者の切換え方と類似する。この共通性が仙台と津軽という地域に起因するのか、あるいは地域変種を使用する話者に共通するのかを明らかにするために、今後、他の地域との比較から分析・考察する必要がある。

(b) SA の《対調》における、ガ格でマークされる名詞句の位置に注目すると、下表のように話し相手（調査者）からターンが移った直後ほどガの明示率が高い（1.2％水準で有意差が認められる。$\chi^2=6.359$）。なお、ターン交代の直後とは、SA・YA にターンが移った後、最初に使用された名詞句を指す。したがって、〔2〕のようにフィラーがある場合や〔3〕のように応答発話が直前に使用されている場合でも、最初に使用された名詞句を「ターン交代の直後」とした。

〔2〕

098YF:そうすると、

→099SA:あのーー、学校がー （YA:はい） 古くなって （YA:はい） それで、んーー。

100YF:あ、なるほど。 〔老－調〕

〔3〕

110YF:じゃー、その後で、そのー、近くの高校にー、

→111SA:あ、そうです。(YA:あー) 希望が 通って、で、こっちの、(YA:はい) あの(YA:はい) 来たわけです。 〔老－調〕

〔表 8*1　SA の《対調》におけるガ格〕

	SA	
	ガ	ϕ
ターン交代の直後*2	22(71)	12(36.4)
ターン交代の直後以外	9(29)	21(63.6)

*1 (　) 内は%　縦の合計が 100%

(c) また、ターン交代の直後以外でも、倒置文の場合はガの明示は 80%と高い (倒置文 5 例中 4 例のガを明示させる)。

〔4〕

→339SA:でーー、(YA:はい、あ)あんまり いなかったんです、人が。

340YA:人が ですか↑

341SA:んー。そういう 時代でー(YF:あーー) 〔老－調〕

このことから、以下のように解釈することができる。

(c-1) ターン交代の直後の名詞句が主格であることを明らかにするために、ガを明示する。

(c-2) 倒置文の場合も、その名詞句が主格であることを表示するために、ガでマークする。

(d) このように、ゼロ形式がバリエーションにかかわる場合には、名詞句の格を表示させようとするか否かで切換えを行なう可能性がある。このことについては、§2.4.のヲ格でも考察する。

2.4.　ヲ格

2.4.1.　結果

〔表 9*1〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ヲ	4(4)	2(2.9)	19(25.7)	4(6.3)	2(2.7)	23(74.2)
バ	7(7)	5(7)	-	-	-	-
ϕ	89(89)	64(90.1)	55(74.3)	59(93.7)	71(97.3)	9(25.8)

*1 (　) 内は%　縦の合計が 100%

〔表 10　SA：動詞との隣接による集計*1〕

		隣接	非隣接
対老	ヲ	2	2
	バ	2	5
	φ	84(94.4)	5(5.6)
対若	ヲ	1	1
	バ	2	3
	φ	57(89.1)	7(10.9)
対調	ヲ	12(63.2)	7(36.8)
	バ	-	-
	φ	36(65.5)	19(34.5)

*1　(　) 内は%　横の合計が 100%

〔表 11　YA：動詞との隣接による集計*1〕

		隣接	非隣接
対老	ヲ	1	1
	バ	-	-
	φ	57(80.3)	14(19.7)
対若	ヲ	3	1
	バ	-	-
	φ	42(71.2)	17(28.8)
対調	ヲ	14(60.9)	9(39.1)
	バ	-	-
	φ	6(66.6)	3(33.4)

*1　(　) 内は%　横の合計が 100%

(1) 表 9 から、SA は《対調》では方言形式であるバを使用しない。したがって、ヲ格の助詞の省略（あるいはゼロ形式の使用）を除き、格形式のみでみるとカテゴリカルな切換えである。

(2) SA の《対調》ではヲの明示率が高くなるのに伴って、φの割合が低くなっている。φを含めたヲ格の表示体系全体からみると、連続的な切換えを行なっていることになる。

(3) YA は、《対老》《対若》でのヲの明示が 10%に満たず、《対調》で 74.2%使用するといった連続的な切換えを行なっている。

(4) 表 10・11 はヲ格でマークされる名詞句と述語となる動詞が隣接しているか否かによって集計したものである。これらの表から以下のことがいえる。

(4-1) SA・YA ともに、各々のドメイン内においては、名詞句と動詞が隣接している場合にはφの割合が高い。

(4-2) SA・YA ともに、《対老》《対若》に比べ、《対調》では名詞句と動詞が隣接するφの割合が下がる。

2.4.2.　解釈

(a)（1）（2）から、SA は《対老》《対若》vs.《対調》では方言形式バから共通語形式ヲに切換えるだけでなく、省略（あるいはゼロ形式）から表示（あるいは格形式）へと切換えている。同様に YA も《対老》《対若》vs.《対調》で非明示／明示を切換えている。

(b)（4-1）（4-2）より、φと有形式の使用には名詞句と動詞の隣接／非隣接が関連していることがわかる。

(b-1) 松田（2000）の東京方言話者では、名詞句と動詞が隣接している場合にヲ格のゼロマーク化が起こりやすいことが報告されている。(4-1) から、SA・YA の各ドメイン内においても同様の結果が得られたことになる。

(b-2) また、SA の切換えには、ドメイン内切換えだけでなくドメイン間においても隣接性が関連している。次の表 12 は、各場面のφの頻度をまとめ直したものである。

〔表 12　SA の各ドメインにおけるφの分布〕

	対老	対若	対調
隣接	84	57	36
非隣接	5	7	19

表 12 について検定を行なうと、高いパーセンテージで有意差が認められる（χ^2 ＝23.575　P<0.001）。つまり、名詞句と動詞の隣接性といった言語内的な要因によって切換えを行なっているのである。

(c) これは、動詞と隣接していない名詞句の格を明確にするために切換えていると考えられ、§2.3.のガ格（ガとφの切換え）と共通する。

2.5.　二格

2.5.1.　結果

〔表 13〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ニ	30(42.9)	19(51.4)	59(59.6)	13(61.9)	17(58.6)	20(100)
サ	37(52.8)	18(48.6)	40(40.4)	8(38.1)	12(41.4)	-
φ	3(4.3)	-	-	-	-	-

*1　（　）内は％　縦の合計が 100％

〔表 14*1　SA の意味領域によるニ・サ・φの分布〕

	対方言話者（対老＋対若）			対調		
	ニ	サ	φ	ニ	サ	φ
移動の目標	4(10.3)	35(89.7)	2	9(24.3)	28(75.7)	-
移動の帰着点	-	4	-	3	6	-
移動の目的(動詞接続)	4	6	-	2	2	-
受身の相手	8	5	-	6	2	-
存在の場所	18(78.3)	5(21.7)	-	17(89.5)	2(10.5)	-
移動の目的(名詞接続)	4	-	-	-	-	-
変化の結果	11	-	1	21	-	-
時	1	-	-	1	-	-

*1 表内の（　）はニとサの使用率を示す

（1）表 13 のように、SA は《対老》《対若》に比べて《対調》ではニの割合が高くなっており、連続的な切換えを行なっている（ニとサについての検定結果は $\chi^2=2.958$　$P<0.085$）。

（2）頻度数は少ないものの、SA の《対老》でみられたφが《対調》では使用されず、形態の非明示から明示へと切換えている。

（3）YA は《対老》《対若》でニを 6 割程度使用し、《対調》ではニのみ使用するといった連続的な切換えを行なっている。

（4）表 14 は小林（2002a）の意味領域の分類を援用し、SA の対方言話者談話（《対老》と《対若》をまとめた場合）と《対調》の分布を示した表である。小林（前掲）では方言におけるニ格の基本的な意味を把握する調査項目として、17 分類を挙げている[1]。表 10 から以下のことが分かる。

（4-1）移動の目標、移動の帰着点、移動の目的（動詞接続）、受身の相手、存在の場所では切換えが行なわれており、すべて連続的な切換えとなっている。

（4-2）切換えにあずかる意味領域のうち、移動の目標、移動の帰着点、移動の目的（動詞接続）では切換えられているものの、サの割合が高い。

（4-3）一方、受身の相手、存在の場所ではニの割合がサの割合を上回っている。

（4-4）《対調》でのサの割合は、

移動の目標＞移動の帰着点＞移動の目的（動詞接続）＞受身の相手＞存在の場所

といった順序になる。

2.5.2.　解釈

（a）切換えのあり方は、§2.3.のガ格、§2.4.のヲ格との比較から、以下のようにまとめられる。

（a-1）（1）（2）のように、SA は、方言形式から共通語形式への切換えとともに、省

略（あるいはゼロ形式）から表示（あるいは形態の明示）へと切換えており、ガ格・ヲ格と共通する。

(a-2) ただし、《対調》において、ヲ格では方言形式が使用されないのに対し、ニ格では方言形式の使用もみられる。

(a-3) さらに、ヲ格に比べてニ格ではφの頻度が少なく、明示的な形態間での切換えを中心としている。

(b) 小林（前掲）で述べられているように、東北方言を中心に使用されているサは、移動の目標（いわゆる方向格）からニ格の意味領域へと意味領域を広げた（広げつつある）と言われている。小林論文では共通語のニの意味領域[1)]を、方向性や移動性といった観点から以下のように分類している。

a. 方向性＋移動性の領域

a-1. 実際の移動（【移動の目標】【移動の帰着点】【移動の目的】）

a-2. 前提としての移動（【出現・発生の場所】【状態の基準】）

b. 方向性のみの領域

b-1. 対象への方向性（【使役の相手】【心的態度の相手】【並列・添加の対象】【変化の結果】）

b-2. 対象からの方向性（【原因・理由】【受身の相手】）

c. それ以外の領域（【存在の場所】【時】）

そして、東北方言一般に、サの領域拡大には以下のような順序が成り立つとしている。

a-1＞a-2＞b-1＞b-2＞c

(4-4) のように、SA が使用するサの使用率も同様の順序を示す。ニとサの切換えには、東北方言で共通するサの意味領域の広がりが関連しており、変化の最終段階にある意味領域ほどより切換えが起こりやすい可能性がある。

2.6. 推量

2.6.1. 結果

〔表 15[*1]〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デショ	-	-	1	-	-	2
ベ[*2]	12	6	-	5	5	-

*1 確認要求は含まない。
*2 動詞の促音便の後のベ（アッペ、クッペ）も含む

(1) SA・YA ともに《対老》《対調》ではベのみ、《対調》ではデショのみといったカテゴリカルな切換えとなっている。

2.6.2. 解釈

(a) SA・YA が《対調》でデショのみを使用されたのは、初対面である調査者に対しては丁寧形式を使用するため、それと連動してデショが選択されたと考えられる。

2.7. 否定表現

2.7.1. 結果

〔表 16〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ない	-	-	68	-	-	47
ネ(ー)	54	46	-	28	32	-

(1) SA・YA ともに《対老》《対調》ではネ(ー)、《対調》ではナイといったカテゴリカルな切換えを行なっている。

2.7.2. 解釈

(a) 談話調査終了後に、調査者が SA に「仙台方言らしいことばは何か」という質問をしたところ、ネ(ー)が最初に回答された。このことから、ネ(ー)とナイが連続的な切換えとならず、カテゴリカルな切換えとなる理由として、シンボリックな形式ほど切換えられるという可能性が考えられる。なぜネ(ー)がシンボリックな形式となるのかということと合わせて、今後も考察が必要である。

2.9. 原因・理由

2.9.1. 結果

〔表 17 接続助詞〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ノデ(ンデ)	-	-	-	-	-	29
カラ*1	63	35	47	21	38	13

*1 いわゆる有声化現象によるガラも含む

〔表 18 接続詞〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ダカラ*1	4	2	7	-	2	9
ンダカラ*1	4	3	-	-	-	-
ホダカラ*1	1	2	-	-	-	-

*1 いわゆる有声化現象によるダガラ、ンダガラ、ホダガラも含む

(1) 表 17 のように、SA の接続助詞は切換えにあずかっていない。
(2) YA は《対老》《対若》でカラ、《対調》でノデ（ンデ）とカラといった連続的な切換えを行なっている。
(3) 表 17 の接続詞では、SA はダカラ・ンダカラ・ホダカラを使用する《対老》《対若》と、ダカラのみの《対調》といった連続的な切換えとなっている。
(4) YA の接続詞はダカラのみで切換えにあずかっていない。

2.9.2.　解釈

(a) (1) のように、SA の接続助詞でノデ（ンデ）へ切換えられないことが注目される。『阪大社会言語学研究ノート』のスタイル切換えのプロジェクト（SS プロジェクト）で報告された方言 SS プロジェクトのうち、東京下町方言話者（松丸・辻 2002）ではンデへの切換えが見られるが、津軽方言 SA（阿部・坂口 2002）、高知県幡多方言 SA（・木 2002）、京都市方言 SA（辻 2003）ではノデ（ンデ）は使用されず、鹿児島方言 SA（舩木 2003）でも 2 例のみの使用である。東京下町方言話者を除く各地域方言の老年層において、ノデ（ンデ）がカラと stylistic なバリエーションとならず、切換えにあずからないことは興味深い。

2.10.　逆接

2.10.1.　結果

〔表 19　接続助詞〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ケド	3	4	21	22	12	41
ケンドモ	13	7	-	-	-	-

〔表 20　接続詞〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
(ダ) ケド	-	-	5	3	1	7
ンダケンドモ	2	-	-	-	-	-

(1) SA の接続助詞は、《対老》《対若》ではケド・ケンドモ、《対調》ではケドのみといった連続的な切換えである。
(2) SA の接続詞は、《対老》でンダケンドモ、《対調》で（ダ）ケドといったカテゴリカルな切換えとなっている。
(3) YA は接続助詞、接続詞ともに切換えにあずかっていない。

2.10.2.　解釈

(a) SA のケドは、接続助詞においてはスタイル的な意味を担わないニュートラルな形式である可能性がある。

(b) あるいは、SA の接続助詞は変化が進行中であるために（共通語形ケドが取り込まれる変化の途中であるために）連続的な切換えとなった可能性もある。

2.11.　引用形式

2.11.1.　結果

〔表 21〕

	SA			YA		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
テユー*1	-	-	11	-	-	23
チュー	1	-	-	-	-	-
ツ(ー)	29	20	22	17	-	-
ズ	1	2	-	-	-	-

*1 トユーを含む

(1) SA は《対老》《対若》で使用する方言形式ズを《対調》では使用せず、《対老》《対若》で使用しなかったテユーを《対調》で使用している。

(2) SA のツ(ー)は各ドメインで使用されており、引用形式全体としては連続的な切換えとなっている。

(3) YA は《対若》でツ(ー)、《対調》でテユーといったカテゴリカルな切換えを行なっている。

2.11.2.　解釈

(a) (1) から、SA のツ(ー)はスタイル的な意味が付与されていない形式である可能性がある。

3.　まとめ

(a)　切換えのあり方について、カテゴリカルな切換えを行なう項目（a-1)、連続的な切換えを行なう項目（a-2)、切換えにあずからない項目（a-3）をまとめると以下のようになる。

(a-1) カテゴリカルな切換えを行なう項目

(a-1-1) SA：対称詞、推量形式、否定表現、逆接（接続詞）

(a-1-2) YA：自称詞、対称詞、推量、否定表現、引用

(a-2) 連続的な切換えを行なう項目

（a-2-1）SA：自称詞、ガ格、ヲ格、ニ格、原因・理由（接続詞）、逆接（接続助詞）、引用形式である。津軽方言話者（阿部・坂口 2002：26）と同様に、助詞がこのタイプをとることが多い。

（a-2-2）YA：ガ格、ヲ格、ニ格、原因・理由（接続助詞）である。

（a-3）切換えにあずからない項目

（a-3-1）SA：原因・理由（接続助詞）

（a-3-2）YA：原因・理由（接続詞）、逆接（接続助詞・接続詞）

（b）切換えの基準については以下の二つがいえる。

（b-1）「SC・YA 対 YF」「YC・SA 対 YF」といった対立から、「方言話者　対　共通語話者」あるいは改まり・親疎などを基準として切換えている可能性がある。

（b-2）SA に「SC 対 YA・YF」といった対立、YA に「SA 対 YC・YF」といった対立がみられないことから、対話相手の年齢は切換えの基準となっていないことが分かる。

（c）SA は引用発話において、他者の発話であることを示すために形式を切換えるといったストラテジックな切換えを行なう（§2.1.）。

（d）SA・YA ともに、対話者に対して格を明確にするためにゼロ形式と具現形を同一談話内で切換える（§2.3.・§2.4.）。

（e）共通語形式の方言への取り入れが切換えに関わっている可能性がある（§2.9.）。

4.　展望

本稿では、いくつかの言語項目において、同一談話内における連続的な切換えが観察された。この連続的な切換えにあずかる形式は、同一談話内のみならず談話間の切換えにもあずかっている。これをドメイン内部の切換えとみるか、あるいは当該話者のスタイルはドメインといった概念では捉えられないとみるか、といった課題が出てくる。あるいは、当該地域の切換えは、言語項目によってドメインタイプをとるものと、方言と共通語が連続的なコードとなっているためにドメインタイプとならないものに分けられるのかもしれない。データを増やし、詳細な分析を行うことが必要である。

また、同一談話内の連続的な切換えは、発話に対する注意度やアコモデーション、談話に対する計画性（マクロなモニター）、発話に対する計画性（ミクロなモニター）といった観点も含めて分析する必要がある。

このような分析を行い、さらに他地域と対照することで、方言話者にとってのドメインとは何か、あるいはドメインタイプが存在するのかといった課題に取り組んでいきたい。

【注】

1　小林（2002a）における例文をあげる。なお、【　】内は意味役割を表す。

（1）東の方に行く【移動の目標】

（2）東京に着く【移動の帰着点―人の移動】

（3）本をここに置く【移動の帰着点―事物の移動】

（4）その本を太郎に貸す【移動の帰着点―事物の移動（授受の相手）】

（5）仕事に行く【移動の目的―名詞接続】

（6）花火を見に行く【移動の目的―動詞接続】

（7）ここに草が生える【出現・発生の場所】

（8）本はここにある【存在の場所】

（9）おれの家は駅に近い【状態の基準】

（10）孫に窓を開けさせる【使役の相手】

（11）嫁に気を使う【心的態度の相手】

（12）雨に濡れて風邪を引いた【原因・理由】

（13）兄弟は兄二人に姉一人だ【並列・添加の対象】

（14）息子は大工になる【変化の結果】

（15）息子に手伝いに来てもらう【受身の相手―「～てもらう」型】

（16）犬に追いかけられる【受身の相手】

（17）毎朝6時に起きる【時】

【参考文献】

阿部貴人・坂口直樹（2002）「津軽方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

小林隆（2002a）「格助詞」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科学研究費基盤研究「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」

―――（2002b）「日本語方言の歴史」北原保雄監修　江端義夫編『朝倉日本語講座　10　方言』朝倉書店

・木千恵（2002）「高知県幡多方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

仁田義雄（1992）「格表示のあり方をめぐって　－東北方言との対照をもとに－」『日本語学』vol.11　5月臨時増刊号

松田謙次郎（2000）「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』第51巻1号

――――（2001）「中間言語と言語変異：KYコーパスを使った「を」格ゼロマーク化

の分析」Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) No.4　神戸松蔭言語科学研究所

————(2002)「「を」格ゼロマーク化と中間言語：中国語母語話者の場合」Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) No.5　神戸松蔭言語科学研究所

松丸真大・辻加代子（2002）「東京下町方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

あべ　たかひと（大阪大学大学院生）

abet@wombat.zaq.ne.jp

〔老ー老〕

収録日時：2003 年 3 月 15 日 収録場所：SA 宅 話題：孫 → 退職前の仕事 → 3 月の予定 → 旅行 → 夏の予定 → 退職前の仕事でやったクラブ活動 → 知人 → 小学校時代 → 幼少時代 → 知人

232SC：じゃ、あの　その頃は（SA：ん）S 高校だった　わけだな。
233SA：ん？
234SC：おらだちが　会ったー
235SA：んーんー。そんだ。あの、あれ、その頃は、S 校[高校名]さな、（SC：んー）いだ。
236SC：その前は？
237SA：その前は、ほれ、Y[高校名]。
238SC：あ、うん、Y[高校名]。
239SA：Y さ、7 年、ん？　8 年が、いで、
240SC：そんないだが。
241SA：んーー。（SC：あーー）7、8 年　いだんだ。
242SC：あの頃は Y[高校名]、強がったよな。（SA：まー）連続だべ？（SA：あー）何年連続？
243SA：んーーと、んーー、5 年がな。（SC：あー、やっぱりー）いや、6 年がな。
244SC：そすれば、あれが？　最後の　1 年は出ねがった　っつー
245SA：いや、ほら、最初の　年（SC：あ、最初）だんだ。1 年なー。（あー）だがら、あれだね、2 年目がら、
246SC：んー、連続だ。インターハイな。国体は　どんだっけ。
247SA：国体も　同じだ。
248SC：国体も　6 年連続？　そのーー、2 年目がらー、
249SA：あっ、国体は　違うが。（SC：んだべ）国体はーー。
250SC：国体は 5 年？
251SA：5 年がなー（SC：んー）最後の年、最後の　2 年。
252SC：ん、最後の　2 年は（SA：んー）な？
253SA：そんだ。んーんー。
254SC：強がったなー。
255SA：んだけんども、あの、A せんせ[先生]さ　比べれば、
256SC：A せんせ[先生]って、
257SA：あの、これ　やって、やってられる人の。
258SC：んーー。あ、そんだ。
259SA：20 年が？（SC：あ？）20 年ぐらいだ。（SC：あーー）20 年ぐらい　なるはずだ。（SC：んーー）20 年連続で　インターハイど　国体ー、
260SC：あ、両方。
261SA：んーー、どっちも　連続で　出るんだがら、（SC：んー）そりゃ、な？
262SC：記録が　なにがには（SA：ん）なるんでねーんだが。
263SA：んー、どーが。
264SC：それだげ　連続だって　いえば、
265SA：最高で　何年なのが、
266SC：ちょっと　わがらねよな。
267SA：ま、1 番では　ねーと　しても、
268SC：んーー。で、この、あの、これは　どーゆー　あれで　やって、やってるんだ？
269SA：これは　だがら　あのー、A せんせ[先生]の 息子さんが、
270SC：あ、そーが。んーーー。
271SA：県教の T 先生がな、
272SC：あ、連絡が　あってー、（SA：そー）あ、そごがら。
273SA：んーー、連絡が　あって、そのーー、「こーゆー　わげなので、やって　ほし（欲しい）、やって　もらいたい」っつー、
274SC：ごとに　なったわげだ。あ。じゃ、あの、今の　人もー、
275SA：ん。だがら、A 先生ー、
276SC：この辺の　人でねー、
277SA：んーー、A 先生のな、（SC：あー、はー）息子さんで　ここに　来て。
278SC：あ、今、こっちに　来て。
279SA：んーー。で、まーー、こーゆー　話をして、（SC：ん）で、テープ
280SC：んー、テープ　とって。
281SA：そんだのさ。

〔老ー若〕

収録日時：2003 年 3 月 15 日 収録場所：SA 宅 話題：YA の幼少時代 → 3 月の旅行 → 調査 → YA の大学生活 → YA のクラブ活動 → 運転免許 → YA のクラブ活動

301SA：今は　あれが、練習は　室内が？
302YA：んー、もう　コートも　だいぶ　整備したんだけど、(SA：んー) まだ　固まってねー (SA：あ、コート) んー、固まってねー　ってゆーが、いー[良い]状態でねーから、(SA：んー) それまで整備は　しながら　とりあえず　練習は　体育館で　やってー、(SA：んー) で、固まるまでーー、
303SA：4 月がらが、外、
304YA：あ、でも　末にー、今月の　末にー、東京　行く。
305SA：東京。練習 (YA：あ) 遠征。
306YA：遠征　ってゆーが、あの、
307SA：試合、
308YA：ん、遠征と　合宿とー、遠征合宿　って　ゆーのが (SA：んー) で、N[大学名]さ。
309SA：N[大学名]。
310YA：んー、だがら、
311SA：N[大学名]は　おじーちゃんも　よぐ行った。あの、鎌倉に　近いとごだな。
312YA：ん？　鎌倉？
313SA：鎌倉さ　近いんでねーが？　鎌倉の、
314YA：あ、そっちじゃ　ねくって、(SA：ん？) 同じ、同じ、同じ線だけどー (SA：ん) T 線[路線名]だけど、(SA：ん) もっと手前の？ (SA：ん) もっと　東京よりの (SA：ん) ん、キャンパス、2 つ　あっから。(SA：あー) 手前の　方の　キャパスに　コートが　あって、(SA：ん) それで、
315SA：コートは　そっちが。
316YA：んー、コートは、(SA：ん) あ、ま、向こうの　キャンパスに (SA：ん) コート　あるのが、ん知らねーんだけど (SA：ん) 末に　行くのは　手前。(SA：んーー) で、手前の　キャンパスさ　行ってー、(SA：ん) その近くに合宿所が　あっからー、(SA：ん) そこ泊まってー、(SA：ん) で、ん、10 分くらいだからー、
317SA：行ったごと　あるのが。
318YA：んー、去年も　行ったし、(SA：ん) 去年の　夏の　合宿　ってゆーが、(SA：ん) 遠征でも　練習しに、(SA：ん) 行ったし。(SA：んー) そこ　行って、
319SA：外　使えるわけだ。(YA：ん？) コート、
320YA：んー、使える。使えるし、
321SA：試合は　しねーのが。
322YA：試合は　練習試合？ (SA：ん) ちょっと　やってー、(SA：ん) ま、
323SA：おじーちゃんが　泊まった　合宿所がな。
324YA：ん？　本当は　寮みたいな、
325SA：んー、寮なんだ。(YA：ん？) そっちの　校舎には　寮　あって、
326YA：あ、それかも。(SA：んー) なんか、1 階が　長い　階段がー (SA：ん、ある) ん、あってー、(SA：ん) で、入って、玄関　入って、左？ (SA：ん) 側に　風呂、シャワー室　みたいなの (SA：んーん) あって、で、(SA：ん) 正面に階段が　あるー、(SA：ん) あ、それ？
327SA：ん、それ。それだ。
328YA：{笑い}
329SA：なんで　そごさ　入れる。
330YA：ん？
331SA：寮生が　いるっぺ。
332YA：春休み　だから、(SA：んー) 寮生は帰省したり、(SA：ん) なんか、がっしゅ (合宿)、遠征とか、(SA：ん) そーゆー、
333SA：行ってるわげだ。
334YA：かな？ (SA：んー) 行ってるんだと　思ー。だから、おれたちが　泊まれるのか、(SA：ん) たぶん。(SA：んーー) 空いてる　部屋かも。(SA：ん？) 空いて

〔老ー調〕

収録日時：2003年3月15日
収録場所：SA宅
話題：自己紹介 → SAの退職前の仕事 → こどもの頃 → SAの大学時代 → SAの退職前の仕事でやったクラブ活動 → SCとの関係 → 仙台のことば

005YF：じゃ、あの、改めて　はじめまして、Aと申します。
006SA：あ、あの、T[SAの名前]です。
007YF：先ほど　ちょっと、あのー、Tさんのことについて（SA：はい）ちょっと　伺いましたが（SA：はい）年齢はー、現在のー
008SA：あ、今　71に、あ、72に　なるんです。（YF：あー）満でね。（YF：あ、はい）ん、満で　72歳です。
009YF：もうー、ずっと　こっ　こっち、（SA：はい）あの、仙台に　おすまい
010SA：えー、ずっと　ここに
011YF：あ、こちらのお宅に（SA：えー）引越しも
012SA：えー、ずっと　ここに。（YF：はい）生まれてから、ずっと。（YF：はい）ま、家はね（YF：はい）建てて、あの（YF：はい）建て替えましたけどね（YF：はい）ま、移ったといえば　そのーー（YF：はい）その時に（YF：えー）ちょっと、その（YF：はい）なに、
013YF：建て替えの　ときだけー、
014SA：そーです。
015YF：あ、はい。で、ご職業、ご職業は　高校の 先生をされて、
016SA：え、退職前はS高校のね、（YF：はい）知ってますか？
017YF：あ、いや、しらな、
018SA：S高校の　教員で　退職しました。
019YF：あー、そーですか。ずっと　仙台市内の、あの、
020SA：高校ですか？
021YF：はい、お勤めになったのは、
022SA：いや、あのー、仙台市内も、あの、S高校は　市内ですよ。（YF：はい）ま、市外も　あるし（YF：はい）いろいろ行きました。（YF：あー）若い頃は　特にね？（YF：はい）いろいろなとこに行きますから。あんだのおとーさんも、あの、
023YF：あ、教師、（SA：んー）あの、高校の教師です。うちの父は　私立なんでー、（SA：あー）はい、あんまり、あ、あんまりとゆーか、全然　移動が　ないので（YF：はい）はい。
024SA：A先生は　知ってますよ。
025YF：あ、そーですか。
026SA：ん、あの、S[高校名]でしたか（YF：はい）強くて（YF：あ{笑い}）いつもね、（YF：あー）ときどき　試合で　あたったりして
027YF：あーー。昔は、
028SA：今は　よく分からない。（YF：あー）今の　状況とゆーか（YF：はい）そーゆーのは。（YF：はい）当時は　すごかったですよ。
029YF：あーー{笑い}
030SA：そんなふーでした。
031YF：あ、はい。ずっと、あの、先生に　なられてから　ずっと　されてるんですか、あの、
032SA：あ、そーです。教師になって（YF：はい）それから（YF：はい）何年　やったことになるのか（YF：はい）ずっと退職まで　やってーー、（YF：はい）ま、最後の　方は、（YF：はい）最後の　何年かは　後進のー、（YF：はい）指導とゆーか、ま、ほとんど　譲って（YF：はい）若い　人にも　やってもらわりゃー（YF：はい）いけない　とゆーことで（YF：えー）そんなことでー（YF：はい）あまり、あまり、その、タッチせずにね（YF：はい）おりました。
033YF：30年、35年くらいー、やって、
034SA：ん、35年ー、もっと　なります。（YF：あ）37、8 年ー（YF：あー）やりました。ずいぶんと{笑い}長い間（YF：笑い）やったんです。まー、高校は　違いますけど、さっき　言ったよーに、その

〔若ー若〕

収録日時：2003年3月15日
収録場所：YA宅
話題：大学の授業 → 卒業論文 → YAのクラブ → YCのクラブ → 友達 → YAの部屋 → パソコン → 運転免許 → YCのアルバイト → YAのクラブ → アルバイト

361YC：じゃ　今月の　末は　と、東京。
362YA：んーー。
363YC：何日？
364YA：んーとーー、
365YC：2、3日？
366YA：いや、10日くらい。
367YC：えーー、なげーな。(YA：んー) 合宿。
368YA：K[YCの名前]のとこは？
369YC：なし{笑い}合宿なし。
370YA：だから　勝てねーんだ{笑い}
371YC：{笑い}　N[大学名]？
372YA：N[大学名]。
373YC：N[大学名]って　どこさ　あるっけ。
374YA：東京の　電車　分かる？
375YC：さあ
376YA：T線[路線名]のS駅[駅名]。
377YC：分かんねーけど、何区？
378YA：何区か、んーー
379YC：分かんねー。(YA：んー) で、練習？試合ー、
380YA：基本的には　練習でー(YC：んー)で、ちょっと　試合ってゆーか、練習試合も　やってー(YC：んー)で、一応　団体も　できるし、(YC：あー) 個人は、ま、もちろん　できるし。(YC：んー) 最初の　何日かは　たぶん　練習。(YC：んー) 後半か　まんなかぐらいに　ちょっと　試合。
381YC：試合。
382YA：ま、勝てる　わけもねー。
383YC：あ、ん、まじ。
384YA：勝てる　わけねー。だって　向こう、チャンピオン　とか　いるんだーー。
385YC：あ、まじでー。
386YA：勝てる　わけねー　けどー、
387YC：やるんだ
388YA：いー　練習さは　なるしー、(YC：んー) つーか、試合よりも (YC：んー) 練習　一緒に　やる　っつーのが (YC：んー) 結構ー、
389YC：ためになる
390YA：んーー、どんな　練習してるとかー、やっぱ　違うと思うし。
391YC：違うよな。
392YA：違うって。去年も　行ったんだ。
393YC：あ、まじ？　違っ
394YA：違っ、違った。で、もともと　選手の質が　違うって。(YC：んー) 全国から集めて、集まってきて (YC：んー) 素質？　センス？(YC：んーんー) 全然。
395YC：そんなに　違うのに　なんか　あーー、向こうに　メリットある？(YF：笑い) 練習したり　試合してもー、
396YA：やらせてもらって、
397YC：やらせてもらっても、なんか、
398YA：悪いよーな気も　するよなーー。まあ監督同士が　同級生でー、
399YC：同級生？
400YA：大学んときの　同級生でー、
401YC：同じクラブの？
402YA：もちろん　同じで、同級、あ、同級じゃねー。(YC：んー)先輩　後輩だけど、結構　つながり　強くてー、(YC：んー) それで　結構　頻繁に　こー　練習とか　合同練習とか (YC：んー) 合宿ってゆーか、(YC：んー) やってる　わけよ。
403YC：なるほど。
404YA：だから、メリットは　ねーけど、ま (YC：んー) そーゆー、
405YC：やれるわけだ。
406YA：やれる　っつー　ことだ。
407YC：どっちが　先輩？
408YA：やーー、わかんねーけど (YC：んー) どっちかー、(YC：んー) たぶん　こっちが　先輩。(YC：んーー) だから、こー　練習とか　やらせてもらえる？
409YC：っつー　ことか。
410YA：たぶん (YC：んー) それで、たぶん、

〔若ー調〕

収録日時：2002年3月15日
収録場所：YA宅
話題：自己紹介 → YAの就職 → YAの専攻 → 大学生活 → YAの専攻 → YAのクラブ → 就職 → 仙台の名所 → YAの部屋

007YF：それでは、
008YA：あ、始ってるんですか？
009YF：はい{笑い}始ってます。Tさん[YFの名前]
010YA：はい、Tです。
011YF：大学生ですか？
012YA：そーです。(YF：はい) 大学の3年、4月で 4年になります。
013YF：そーすると、年齢はー、
014YA：21ですね。
015YF：満21歳。
016YA：そーです。
017YF：生まれたのは、
018YA：僕ですか？(YF：はい) んとー、ここです。
019YF：あ、ここ。(YA：はい) ずっと ここですか、あの、
020YA：あ、ずっと ここです。
021YF：今度 4年ってことは 今 就職活動してるんですか？
022YA：いや、あの、クラブの関係で 就職するんでー、
023YF：クラブの関係、
024YA：はい、テニスなんですけど、
025YF：あ、あー、じゃあ おじーさんの 影響というか、
026YA：ま、そんなとこなんですけど。
027YC：あーー。それで 就職する ってことは スポーツ店とか メーカーとかですか。
028YA：そうですね、メーカー (YF：あー) 一応 メーカーですかね。(YF：んー)
029YF：テニス関係 ってゆーと、K[会社名]とか Y[会社名]ですか。
030YA：いや、{笑い} そんなに 有名なとこじゃ ないんですけどー、(YF：はい) ま、S[会社名]って とこです。
031YF：S[会社名]
032YA：知らないですよね。
033YF：あ、ちょっと 知らないですね。
034YA：ほんと 小さいとこなんでー、(YF：はい) 知らない 人の 方が 多いと思うんですけど。
035YF：仙台市内なんですか。
036YA：あ、いや、東京です。
037YF：あ、そーなんですか。(YA：はい) 東京の どの辺ですか。
038YA：調布？ (YF：はい) あの辺です。
039YF：あー、僕、大学、学部んとき、あの辺に 住んでたんですよ。(YF：えー) そーですか。(YA：はい) で、ラケットかなにかを 作ってるー、
040YA：いや、ラケットじゃなくてー、(YF：はい) ガットー、(YF：あ、ガット) あ、あの、ガットを 張るための 機械 って 知ってます。
041YF：あーー、分かります、分かります。(YA：んー)僕も 高校んとき テニス やってたんで。
042YA：あ、まじっすか。(YF：はい) えー。(YF：はい)あの 機械を 作ってる 会社で (YF：えー) だから、あんまり 知られてないー、
043YF：あ、テニス やってても あんまり 知らない。
044YA：そーだと思います。
045YF：じゃあ 実際に、その、その 機械を作るー、仕事を、
046YA：あ、じゃなくて、
047YF：じゃなくて、営業とか、
048YA：まだ 入ってみないと わかんないんですけどー、(YF：あ、はい) 作る方じゃなくて、(YF：はい) 売ったりー、んー (YF：はい) なんか まだ わかんないんです {笑い}
049YF：あ、そーですか。(YA：はい) じゃ、ずっと テニスの、テニスに 関わっていける ってゆーか、(YF：そーですね) なんですね。
050YA：そー なりますね。